Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2002.2
発行者：中島 秀雄
編集部：内田順
編集レイアウト：荒井 崇

NO.21

CONTENTS

・ クラシックモダンへ
・ 第６回研究会展覧会[光への探求]ｽﾅｯﾌﾟ/全作品
・ ギャラリー青山見学レポート
・ 米国撮影紀行（後編）
・ 写真収集家の気ままな散歩（１）
・ インフォメーション

クラシックモダンへ

中島　秀雄

明けましておめでとうございます。

早いもので､すでに１月が終わろうとしている。昨年の研究会展覧会は会場を代官山から青山に移すことになり、それでもおおくの来訪者を迎えたことで、我々にとっては新たな出発のきっかけにもなった。今年はヨセミテ撮影が予定され、どのような作品が集まり、どんな展覧会になるのか楽しみでもある。

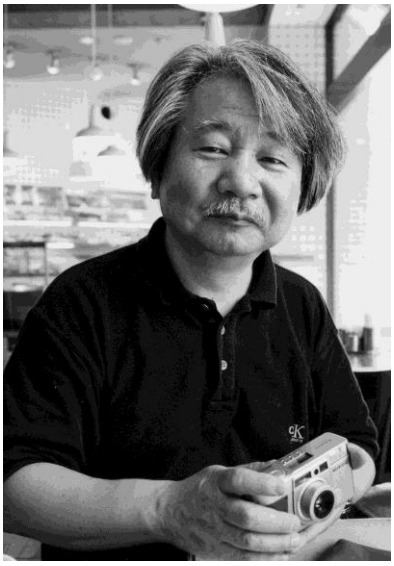
ところで、私はこれほど頻繁に青山にかよったことはかつてなかった。そこで、ギャラリーに出向く前に青山通りを歩き、周辺にあるモダンな店のいくつかを眺めてみた。女性をターゲットにした超モダンといわれるショップはどこも商品は少なく、空間と照明によって商品価値を高める方法が取られていて、どこもギャラリーとしてのイメージを強めていた。デザイナーにとって単に商品を売るという従来の方法よりも、自らの創作品を売るというイメージに切り替えることで、アーティストとしての主張を強めようとしているように感じた。しかし、この手の店に入るにはちょっと勇気が必要で、私は自分もデザイナーのつもりになってみた。よく見ると、モダンといわれる商品ではあっても襟や袖口、それを取り巻くステッチにクラシックなかかとやつまさきのカーブにはかつてのデザインを踏襲していて、それを素材や色味でモダンに感じさせている。

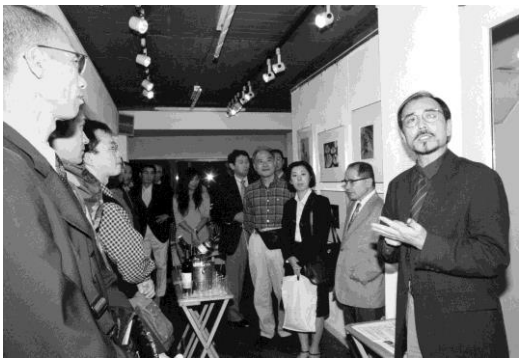
カメラケースを最初に作ったといわれるルイヴィトンのバッグも、様々な新素材を使いながらクラシックなデザインをたっぷり含んだモダンなバッグだと感じた。

我々は、アダムスやウエストンの正統な流れを引き受けているという意味ではクラシックなスタイルといえるかもしれない。しかし、正統な流れを前進させようと、そこにモダンなイメージを追求し強めて行くことも我々のこれまでの課題であり、これからの課題でもある。何気ない自然の風景の中にも、その切り口にモダンな感性を感じることは出来るだろうし、静物写真により強く求めることは可能だろう。ジョン・セクストンやマイケル・ケンナの作品を見ていると、正統な手法を踏襲し同じような被写体を見つめていながら、そこにはどこかモダンなセンスを感じるのはなぜなのだろうか。我々としては一度分析してみる必要があるだろう。コンピューターで設計されたモダンなレンズはかつてのレンズよりシャープで明快な画像を与えてくれるし、アダムスも新しい機材を使うことを奨めている。また、フィルムや化学薬品、そして、展示方法にもクラシックやモダンの余地はいくらでもある。テーマや被写体を含めて我々はもっと研究する必要があるだろう。

クラシックやモダンだけがいいのではなく、そこからほんのわずかでも越えたとき我々の喜びは高まり、多くの人の共感を得られるのだろう。昨年の展覧会には、クラシックモダンへのかすかなイメージを感じたのだが、皆さんはどうでしたか。

２００１年写真展スナップ



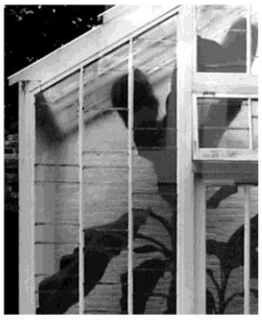


第６回研究会展覧会［光への探求］全作品（1/3）

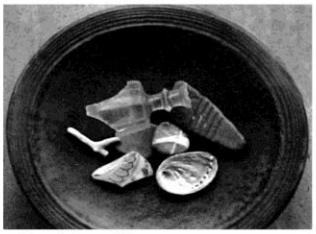
Ghost town, Bodie,California
中島　秀雄

Ghost town, Bodie, California
中島　秀雄

Court House, Mariposa, California
中島　秀雄

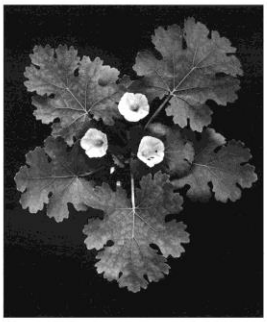


Orangery Of The Lost Garden
石原　眞澄



On The Shore
石原　眞澄

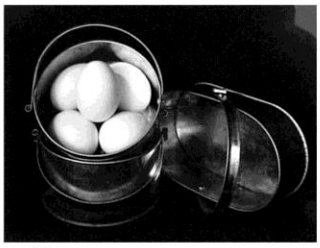
Peaceful St.Ives
石原　眞澄



Plants
藤枝　義弘

In the forest Ⅰ
内田　順

In the forest Ⅱ
内田　順



Eggs
藤枝　義弘

Observatory
畑　文夫

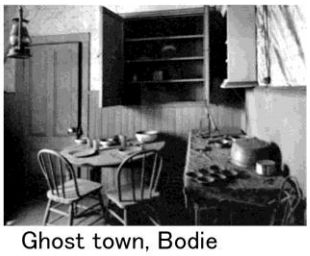
Driftwood
畑　文夫

第６回研究会展覧会［光への探求］全作品（2/3）

Church
佐伯　勝幸

Still life
古川　翔士

Fall
古川　翔士

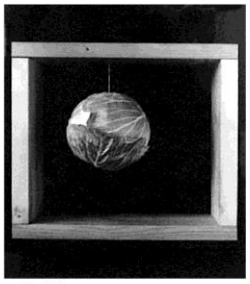


Ghost town, Bodie
木下　威

Cloud, Sierra Nevada
木下　威

Vegetables
菅野　慶孝

Rock
宮岡　貞英

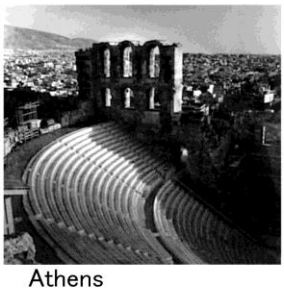


Cabbage
佐野　司郎

White birches
鈴木　武志

Paddy field
小野　望

Norikura
田中　肇



Athens
田中　肇

第６回研究会展覧会［光への探求］全作品（3/3）

Sands and rock
石井　政吉

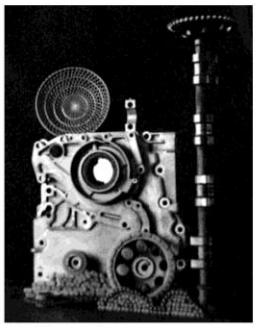
Fall
松本　ひさ子

Shells
松本　ひさ子

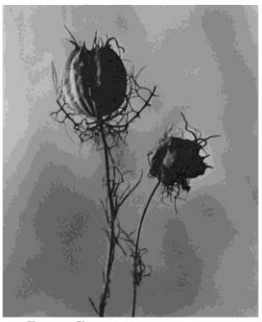
Plants
圓子　靖也

Engine Drivers
ハービー・山口

Trees and Stream
ハービー・山口



A study
荒井　崇



Dry flower
荒井　崇

Tableware
田中　英司

Ghost town, Yeso
済藤　隆義

Prayer
済藤　隆義

Robert
山本　昭二

ギャラリー青山見学レポート

日本工学院専門学校　マルチメディア・アート科　一年
金子　貴宏

以下の文章は、中島先生の教え子である金子さんによる、ゾーンシステム研究会写真展(2001 年 11 月）に関するレポートです。こういった若い人の感じ方はとても貴重なものだと思います。

ゾーンシステムの写真展ということで、そのシステムの詳細な事はまだわからないが、展示してあった写真全てから最初に受ける印象は、どれも刹那的でないということ。つまり時間と共に変化している被写体の一瞬をとらえたというよりも、撮影者が被写体の一瞬を止め、それから写真を撮ったというような感じを受けた。そしてじっくり写真を観ていくと、被写体の縁がはっきりと写し出されているせいか、それが線となって観賞している側に強烈な印象となって入ってくる。だから、今回展示してあった写真の特徴としては、物体の持っている線的要素を引き出し、それを画面上でいかに構成していくかというようなところ所にあり、それがまた、ゾーンシステムの醍醐味となっているのではないかと、そんな風に感じている。

今回観た写真の中で私は２点ほど印象に残った写真があった。まず１作品目は「In the forest 1」。これは画面いっぱいに、何かの植物の葉を写したものであったが、葉の重みというのが必要以上に伝わってきた。だから実際の葉の重さよりも重いのではないかと思わせるような写真であった。そしてこの写真は、多少懐の暖かい人が住むような邸宅の応接室などに飾られると様になるのではないかと、その写真の行く末まで考えてしまった。…余談。

そしてもう１つの作品というのは「Fall」。これは画面半分に滝のような水の流れが写っているもの。私は個人的には、画面に奥行きのある写真がすきなのですが、この「Fall」はそれとは違って、いたって平面的なのですが、画面左半分は水が上から下へと流れ落ちていてある種の「動き」を感じ、それとは対称的に右半分には、黒い岩がいっぱいに写り、重みの伴なった「静止感」を与えていた。私はこのように、１枚の写真の中に「動」と「静」を同居させている所に、新鮮な印象を受け、気になった１枚としてあげた次第である。

米国撮影紀行（後編）

中島秀雄

リーバイニングの朝は、モノレイクの東に陽が昇ることで始まる。時計の針はすでに 6 時を回り、宿泊客を送り出した部屋のドアは開けはなたれ、強い光が斜めに差し込み深い影をつくっていた。芝に撒かれた水は光り、気持ちのいい朝ではあるが、カリフォルニアの乾いた空気の中では光は痛いように感じた。

我々は、次の目的地ボーディーに向かうため車に荷物を積み込んでいた。サングラスをかけ黒の上下に身を包んだ女性が、長い髪をゆらしながらゆっくり我々の方に近づき、クロームメッキがまだ新しいハーレーの一台に長い脚を開いてまたがった。我々の挨拶に、ほんの僅かな笑みを浮べ同じ言葉が返ってきた。連れの男も同じようにハーレーにまたがった。女性の足が激しく動くやいなや、次の瞬間あたりはすさまじい爆音と振動に変わり、静寂な朝の乾いた空気が無数にヒビ割れたにように思えた。エンジンのすさまじい爆音に、もし部屋で寝ているものがいれば確実に起こされ、文句の一つや二つ言う人がいたかもしれない。二人は互いに合図を送り、何事もなかったように通りへ出て行った。この光景は完璧で、私は映画

イジーライダーのワンシーンを思い出し、自分も映画の中に登場しているような錯覚を覚えた。木下氏は思わずカメラを取り出し、何枚か撮っていた。私はこの一瞬の言い知れぬ光景にただ何も出来ず、じっと眺めているのがやっとだった。男と女の落ち着き払い自信に満ちた動きや表情に、私は今まで見たアメリカ映画の様々なシーンとダブらせて眺めていた。アメリカ映画の様々なシーンは、こうした日常の中の何気ない一コマの連続で成立し、成功しているといえるのかもしれない。

リーバイニングの街を出てしばらくモノレイクに沿って進むと、右側に小さなロツジ風の建物が見えてくる。ここはアダムスの別荘だった所、今は息子のマイケルが経営するレストラン・モノインになっている。アダムスがまだ元気に活動している頃、彼はいくつかの山小屋をロケーションの拠点にしていたようで、ここもその一つだ。モノレイクにたっぷり水がある頃には湖のほとりと呼べたであろうが、現在はすっかり水が後退してしまい、荒地のような場所に見える。それでも基礎杭を高くして、いつ水が増えてもいいようにはなっている。よほどの釣り好きか、モノレイクに強いこだわりがなければこんなところに小屋など誰も建てないだろう。しかし、アダムスはモノレイクですばらしい写真をいくつか残していて、微妙な光のタイミングをこの小屋でじっと待

っていたに違いない。ひょいとやって来て湖を眺めてみても、平板な光では感動するような写真にはならず、自然が作るドラマがどうしても必要になる。

後のことになるが、我々がボーディーで写真を撮っていたとき、地元のアマチュア写真家が我々に声をかけて来て、モノレイクの上空に低いまき雲が現れたというのを知った。

管理運営しているマイケルもすでに70歳を越え、一昨年私が東京で会ったときは髪の毛に白いものがまじっていた。マイケルは子供の頃、お父さんのアンセルといっしょに撮影に同行していて様々なテクニックや撮影ポイントを知り尽くしているはずだが、空軍の医者として成功し、写真にはほとんど興味がないように見える。ヨセミテにあるアダムスギャラリーも奥さんのジェニーさんが管理していて、父親と同じことはしたくないというアメリカ人気質の現れなのかもしれない。そういえばアダムスのネガは、テキサス大学にあるセンター・オブ・クリエイティブ・フォトグラフィーにすべて収蔵されている。なんとももったいない話である。

コンウェイサミットの丘を越え、長い下り坂を走ると右に標識が見えてくる。ボーディー4 1/2マイル。両側を草原のなだらかな丘が連なり、道はゆるやかなカーブとアップダウンが 6km ほど続く。高度はすでに 2400m あり、高度と乾燥に耐えられる高さ 30cm、直径 40cm ほどに枝を茂らせた樹木が遥かかなたまで群生している。そして、その先には我々が越えてきたシエラの山並みが残雪を輝かせて連なっている。じっと眺める余裕はないが、ハンドルを握りながら広大なアメリカ大陸を感じるのに十分な光景だった。

やがて、前方にボーディーの町並みが見えてきた。途中からダートの道に変わっていて、我々は砂ほこりを巻き上げながらゲートに到着した。

陽は去年よりいくらか柔らかい気がしたが、他は何一つ変わらなかった。

私は以下のようなテーマを考えていた。

長い時間陽にさらされ、変化した建築物のディテール

風化した内部の様子。

100 年以上前の生活用品。

点在する鉱石採掘工具、機械。

現在も使われている墓地

ボーディーを写真に撮りたいと思った理由は、ボーディーの町並みが子供の頃に見たアメリカ映画やテレビに映された古き良き時代のアメリカと重なるところが多く、建築物のデザインや周辺のデイテールに強いノスタルジーを感じたからだ。また、窓枠、ドア、丸椅子、テーブル、そして、ブリキカンの周囲に描かれた文字やデザイ

ンに、19 世紀のアメリカのエキゾチズムを感じたからでもある。私は、風化した建築物の撮影にフィルターを多用した。それは、建築物の時間性を幻想的なイメージで捉えたいと思ったからだ。そして、できるなら空に雲が欲しいと思っていた。今回はその願いがかない、午後になると雲が出始め、一雨きそうな暗い雲や綿雲、巻き雲まで現れた。最後の日には小さな竜巻も見られ、これほどの気象の変化など考えもしなかったが、長くいたことが幸運を呼んだ。竜巻は一瞬のこと 4 x 5 カメラで撮ることは出来なかったが、いつも首に下げている 35mm の小型カメラが役に立った。持参した小型カメラはコンタックス Tv3 で、4 x 5 のフレーミングやレンズの選択にも大いに役に立った。

多くの人が、撮影にたくさんのカメラを持っていく気持ちはよく分かるが、自分の中心となるテーマが何か分からなくなり集中力を分散してしまう。私は、カラーで撮りたくなる被写体に出会うときもあるし、自分の行動の記録や資料のために小型カメラにカラーフィルムを詰めて撮影し、それでほぼ満足している。そのためには、小型で優秀なカメラがいいと思っている。しかし、小型カメラは構造上かなり無理があり、今回使ったコンタックスにしても決して満足しているわけではないが、写真を撮りたい気持ちを別な形で持続

させてくれる。

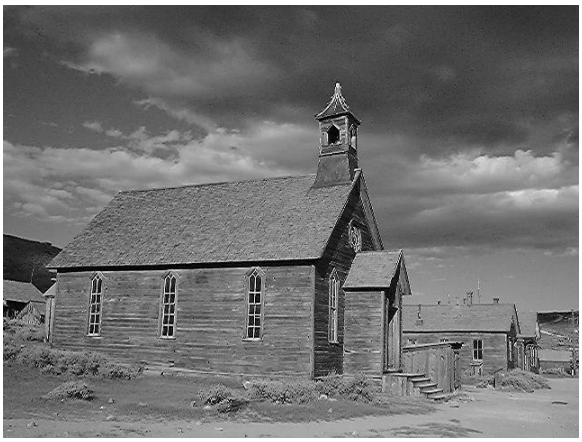
ここ、ブーニー雑貨店の歪んだ窓ガラスから内部を覗くと、ちょうど 19 世紀のカメラをレンズから覗き、焦点面に映った画像を眺めているような錯覚に思えてくる。カウンターには重そうな鉄製のコヒーミル、釘や針金の量を計るための天秤量り、ラベルの文字が剥がれたガラスビン、飲みかけのウイスキーグラスが置かれている。床には埃にまみれた麻布、木箱、ロープ、農機具が所狭しと並んでいて、我々が立っている正面のガラス戸を開ければ、すぐにでも商売がはじめられるように見えた。今にも、店の奥からエプロンをした少し太った店員が出て来て、ニコニコしながら入り口をふさいでいる我々に、そこは邪魔だからどいてくれと言ってくるようにも思えた。大量の商品をそのままに扉を閉めなければならなかった理由はいったい何だったのか、今となっては誰にも分からないのかもしれない。

当時の生活をできるだけ知りたいという気持ちがあって、内部が覗けるならすべて見たいと思った。ドアが傾き、天井や壁が剥がれ、まるで処理の不完全なプリントが長い時間空気にさらされ、化学変化によって乳剤が剥がれ落ちているような建物もある。また、別の建物では汚れたブーツで歩いたであろう木製の床や埃が厚く被った丸いテーブルや椅子、ドアの取っ手、アイビー柄の壁紙やモールデイング、スプリングが飛び出た

ソファー、壁にはウェスタンハットが掛けられている。これらを眺めていると、荒々しい仕事を終えた人々の休息の場としての様子も見えてくる。強い光を背に受けていたせいか、この光景に陰湿感は持たなかった。それより、光と長い時間が作り出した創造物のようにさえ見えた。しかし、町並みや物の輪郭を写真にすることで、果たしてボーディーの街が飲み込んできた時間の厚みを十分感じ取れる写真になるのかどうかはっきりとは分からなかった。歪んだガラス窓越しの撮影と連続して吹きつける風の制約が私のイメージを鈍くしていたからだ。私は、撮影の途中で迷いがあれば一度切り上げ、出直すことで迷いを整理してきたが、外国での撮影はそうはいかない。ポラロイド写真が確認の意味ではかなり役に立ったが、拡大しなければ分からないものもあり、完全ではなかった。

町の中心部にインフォメーションセンターがあり、資料館にもなっている。洋服やデザインの型紙、ネクタイやボタン、皮の靴やその木型、ナイフやフォークといった庶民の普段の生活にかかせない身の回りのものがガラスケースに収められていて、一目見れば当時の生活様式がわかるようになっている。資料館といっても、当時の連物をそのまま使っていることもあって老朽化が進み、床は歩くたびに揺れる。見学者は絶えることがなく、そのたびに撮影は中断し、40 分待つこともあった。２時間で４カットしかとれなかった。カメラを構えていても、見学者からは誰一人邪魔だといった態度を示してこなかった。

私は一つの違和感を持っていた。それは、街の中心にあるホテルをのぞいたときにより強くなった。ロビーやカウンター周りの空間が、今のアメリカでは考えられないほど狭いのである。ベッドルームも狭く、小ぶりのシングルベッドが一つ



あるだけで、とても現在のアメリカ人では部屋として使えないだろうと思った。そういえば個人の住居も小さいし、バーや商店も小さい。平均的な日本人なら不自由しないかもしれないが、当時のアメリカ人はどうだったのか。周囲には木材になる木は一本も生えていないし、文献によれば材木はここから 50ｋｍ あるモノレイクの周囲から運んだと書いてあり、経済的なことからぎりぎりのサイズで建てるしかなかったのか。それとも、当時のアメリカ人は今より小柄だったのか。メキシコ人も多く入り込んでいたことから、このサイズで不自由はなかったのかもしれない。ある大学の先生は、アメリカ人は 20 世紀になって大きくなったといっている。

山にある金の採掘現場を直接見てみたいと思い、項上に向かった。有刺鉄線にそって登っていくと途中から柵は左右に広がり、それ以上登ることはできなかった。採掘現場はまだ先で、項上附近には掘った土が小さな丘となっていくつも点在し、強い光に照らされ赤白くまだらに見えた。下からおよそ 150m 程登った斜面から見たボーディーの町は、周囲は丘に囲まれ、住居空間としては申し分ないように見えた。西の方角にはほぼ同じレベルでシエラネバタの白い山並みがくっきりと見え、ここがかなり高度の位置にあるということが分かる。広大にしてこのような辺鄙なとこ

ろで、いったいどうやって金を見つけたのだろうか不思議に思えてくる。ゴールドラッシュの頃には様々な情報が錯綜していたに違いないし、占い師やそれに似たような人物もいたことだろう。盗み聴きしたり、脅かして金の在りかを聞き出したり、あるいは偽の情報で一儲けした人間もいたかもしれない。しかし、科学者ではなくても、様々な採掘現場を渡り歩き、体験から地質を分析していた人間もいたのだろう。私も石を拾って割ってみたが、見かけよりかなりもろく中は鉄分の多い白と茶色のまだら模様になっていて、ひょっとしたらと思わせるに十分な色味ではあった。

我々の宿泊地であるブリッジ・ポートで見る夕焼けは本当に美しい。この日も太陽は西からたなびく雲の中にすでにかくれ、すばらしい夕焼けが想像できた。ボーディーから戻った我々は、いそいで車をロッジに入れ、小型カメラを取り出して夕焼けに向かった。すでに街全体がマゼンタ色に染まり、何か幸福な出来事がこれからやってくる気分に満ちているように思えた。通行人と交わす言葉にも夕日が含まれていたが、この日はそれだけでは終わらず、今日はどんな魚が釣れたのか聞いてきた。ここブリッジ・ポートは釣り目的の観光拠点にもなっているのだ。

私は道路を横断してスーパーマーケットに向い、暮れかけて輝き出したネオンの光を画面に入れて、刻々変化する夕日にカメラを向けた。絞りを f8 にしてシャッターはオートにした。目前の美しさに感動し、その経験をカメラで撮影できることの喜びをこのとき私は指先に感じた。

陽が沈み流れる雲の赤味はしだいに薄くなり、これ以上赤味を増すことはなかった。

部屋に戻り、明日の帰りの準備をした。合計で 230 枚撮っていた。何か成し遂げたという気持ちはあったが、満たしえないものもあり、もう一度

行きたいと思った。

今回も、すばらしい経験と体験になったことを報告します。

尚、撮影に同行してくれた木の下さんに感謝します。

写真収集家の気ままな散歩（1）
ープロローグ

荒井　崇

ゾーンシステム研究会における今年のテーマは『プリントをコレクションする』です。プリント収集歴１０年の私としましては、何とか会員のみなさんにもプリント収集の楽しさを伝えたいと考えまして、時々、プリントコレクションに関する記事を載せて行くことにしました。

まずプリントコレクションと聞きますと、数十万円もする著名作家の高価なプリントが頭に浮かんで来て、お金がかかるというイメージが先行してしまいます。しかし、決してそんなことはありません。例えば家族が撮影した写真を、ブックマットにして保管することだってプリント収集なのです。誰が撮影した写真であろうとも、良い写真であればそれは収集する価値があるのです。

ましてや、私たち研究会のメンバーは、身近にすばらしい写真家がたくさん居るのですから、プリント収集に関しては格好の環境に身を置いている訳です。

また、プリント収集をしていると、自分自身の作品にも幅が出てきます。作品を手に入れるということは、例え廉価なプリントであっても自分のお金をハタいて購入するのですから、まず真剣に作品を見るようになります。そして作品をじっくり見ることによって、表現に関してもテクニックに関しても、自分と違った作品を見ることが肥しとなり、自分の作品を高めることになります。

とてもタイムリーなことに、今年の３月、私の所属するフォト・スカラベという写真鑑賞サークルで、コレクション展を行います。

以下にその案内を載せますので、ぜひとも見に来ていただきたいと思います。皆さんご存知の、エドワード・ウェストン、アンセル・アダムスや中島先生の作品も展示する予定です。

『ﾌｫﾄ･ｽｶﾗﾍﾞ写真ｺﾚｸｼｮﾝ展２００２』
のお知らせ

このたび、写真活動グループでありますフォト・スカラベによる、写真コレクション展を開催致します。

フォト・スカラベは、写真収集家佐久間猛氏の主宰する写真活動グループで、写真を鑑賞することを主体に活動しています。しかしながら、決して写真研究家や収集家のためのグループではありません。写真家との触れ合いや、写真の歴史／動向を知ることで、写真を見ることの楽しさを、一般の方々にも広めて行くことを主眼としているアマチュアのグループです。

過去におけるフォト・スカラベの主な展覧会関連活動としては、『フォト・スカラベ写真コレクション』展（1995 年）、『写真芸術の時代』展（1998 年 12 月～1999 年１月）（松涛美術館へコレクションを提供）を行っておりまして、本展は３回目となります。

今回は、写真の黎明期に撮影されたウィリアム・ヘンリージャクソンによるアメリカ開拓時代の写真から、アンセル･アダムスに端を発するゾーンシステムを駆使した究極のプリント表現。（日本人作家としては中島秀雄）エドゥアール・ブーバの魅惑的なスナップショット。そして作者自身の価値観を打ち出してゆく佐藤時啓、オノデラ・ユキ、など新鋭のコンテンポラリーフォトグラファーによる作品。更には、現在記録写真としてしか価値が認められていないが、その隠された美学がかもし出される、天体写真など理科学写真

の展示も行います。

また、今回は著名作家のみならず、まだ世に知られていない新人作家もおりまぜて、写真表現のさまざまな側面を提示致します。

これにより、写真を自由に、多方面から鑑賞してもらうことで、写真に対する既成の価値観を押し付けるのではなく、むしろ一般の鑑賞者側から、新しい価値観を見出してもらうきっかけを作ることが、本写真展の目的であります。そして少しでも多くの人に、写真を鑑賞してその価値を発見する楽しさ、更には写真を手に入れる喜びを感じてもらえる写真展を目指しています。

【展覧会詳細】

［タイトル］

『ﾌｫﾄ･ｽｶﾗﾍﾞ写真ｺﾚｸｼｮﾝ展２００２』

［開催場所］

『ギャラリー遊』

（小田急･井の頭線下北沢駅南口より徒歩１３分）

［開催期間］

２００２年3月１６日（土）～3月２４日（日）

開催時間：11:00～19:00

ただし初日（３／１６）：13:00～19:00

最終日（３／２４）：11:00～18:00

休廊日：会期中無休

［主な展示予定作家］

ウィリアム・ヘンリージャクソン／アンセル・アダムス／エドゥアール・ブーバ／ウィン・バロック／マイケル・ケンナ／Ｊ．Ｎ．ユルズマン／エドワード・ウェストン／植田正治／細江英公／井津建郎／オノデラ・ユキ／中島秀雄／佐藤時啓など３０～４０点